

新選組旅行記

日曜日の晩飯時、テレビから「宇都宮が駄目でも会津がある。会津が落ちても蝦夷地がある」という声がありました。大河ドラマ『新選組!』での土方歳三役、山本耕史の台詞。ドキッ、としたのを今でも覚えています。これがそもそものきっかけになります。

ボクは何よりも自分の信念を通そうとする人間に憧れます。土方歳三の記録を見ると、新選組最後の幹部として、函館まで戦った執念に、己の信念とか誠義などの感情の部分。人間の胆力というものを見た気がします。以来、新選組は自分の中でキーワードになりました。過日、新選組史跡巡りのため東京に行ってきたので、そのいくつかを紹介します。

まずは土方歳三生家跡から。ここは現在子孫の邸宅兼、子孫が営む資料館になっています。下調べにより、資料館は旅程上、休館日と重なり入れないことは知っていましたが、何とか副長の生家で空気に触れたいと思い暴風雨の中、日野市をひたすら歩きました。武家は敷地に幹の細い竹を植えるのが好きみたいです。これを矢に加工する。土方家には矢竹があります。土方家は名字を許されており名主格ではあったが、農民です。農家に矢竹があるのは何故か。これは、副長が少年の頃、武家に憧れて植えたのだそうです。矢竹は今も生い茂っている。主なき今も育つ竹。そして、先祖に対する恩恵の念を忘れない土方家の人々。これには、感慨深いものがありました。次に副長のお墓がある、石田寺に向かいました。その途中、家々の表札を見るとそこら中「土方」。圧倒的に「土方」。これが噂の、ってやつです。明治になって副長にあやかっただけでほとんどの家が名字を「土方」にしたと読んだことがある。ボクがもしこの村の女の子の家のムコになったら余裕で土方やなと思うくらい「土方」でした。いざ、石田寺の門をくぐると親族以外参拝禁止の立て札が。墓石に目をやると、無数の墓石の中から、土方家の「三巴の玉」の紋が即座に視界に入ってきました。声も出さず立ちすくむ。構わず行きたいところなんです。何故か近づけなかった。ヨソ者を近づけない。それは、シルシの持つ力以外の何物でもありません。でも、厚かましくちょっとだけ踏み込んで拝みましたが。

翌日は晴れ。千葉の流山に足を伸ばしました。近藤勇が陣を構えた最後の地、流山。ここに官軍が乗り込んで近藤は出頭し、土方と離別する。大久保大和という偽名で出頭します。しかし官軍に寝返った元隊士に正体を見破られ捕縛。この流山の陣屋跡には石碑が建つばかりですが、何もない分、様々な想像力を掻き立てられました。10代の頃からの付き合いで志半ばで離別した近藤、土方。助命嘆願のために奔走するも叶わず、残された者の務めとして近藤の意思を受け継ぐ土方。そのようなことを考えていると、熱いものがこみ上げてきました。近くにある、図書館に足を伸ばし、流山陣にまつわる史料を拝見して、板橋に行く。そして日野に向かいました。

日野は、土方の生家があり、六番組長井上源三郎の生まれた場所です。そして、近藤、沖田総司が出稽古でよく立ち寄った場所でもあり、剣術の道場を構えた佐藤彦五郎の邸宅があった。また、彦五郎は土方と義兄弟にあたり、佐藤の道場で、近藤、土方、井上、沖田と新選組の中核メンバーが会した場所が佐藤彦五郎邸宅跡です。彦五郎は邸宅で宿を営んでいた。この宿は、当時の習慣を伝える造りになっています。彦五郎は日野の名主で、新選組のよき理解者でもあり、金の普請にも応じていました。だから、残っているエピソードも多い。一例をあげますと、函館戦争の話があります。

官軍の総攻撃が始まる前、土方は死を覚悟する。目をかけていた少年隊士、市村鉄之助を呼び、戦況を佐藤彦五郎に伝えるよう命じます。「手はずはついているのですぐに函館を脱出せよ」と。市村は土方らと「一緒に討ち死にする覚悟です。命令には従えません」と言って初めは応じなかった。すると土方は「討ち死にする覚悟なら、命令に背く罪で今討ち果たしてやる」と刀を抜いた。その迫力に押されて、市村は泣きながらうなずき、了解した。その様子を見て「にこりと笑った」という。土方には子供がいないので市村を子供のように可愛がっていたんでしょう。持金300両を市村に渡し、逃がしてあげた。この話は、市村が日野まで無事たどり着き佐藤彦五郎に話した記録で、日野宿にいるガイドのおじいさんが語ってくれます。とにかく「にこりと笑った」というのが印象的でした。土方の優しさやうかがえる記録に、思わずジーンとききました。最後に史跡巡りのシメとして、教えてもらった日野の蕎麦屋さんに入る。日野の蕎麦は蕎麦殻があまり入っていないらしく、白い。そしてきめが細かいので、舌触りが良く、弾力がありました。今まで食べた蕎麦よりも長く、細かった。ツユも変なしつこさはなく、大変うまかったです。風土は五感で味わいたいもの。やはり、土地の人に教えてもらって土地の物を食べるのは、物事を理解する第一歩だと再認識しました。

今回の旅で感じたことは、当たり前なんです。小さなエリアから物事は始まり、地域の人の支援もあったからこそ、地に足の着いた、自分の信念を全うできたのだろうということです。そして、信念や誠意とは口で言うのは簡単ですが、なかなか貫けるものではない。だからこそ、生涯を通して信念を貫いた人間に人は憧れ、物語として息づいているのだろうとも感じた。自分のスジは、どれほどのものか。これを試すことが肝要だと感じた旅でした。



最後に、平日の仕事で疲れているにもかかわらず、せつかくの休みを日野宿行きに付き合ってくれた、先輩、友人に本当に感謝します。「今度来るときは早く言ってな。部屋片付けとくから」という言葉をかけてくれた時にボクは救われた気がしました。ありがとうございました。誠
(楠田 行展)

next collective

次回collectiveは
2007年冬を予定しています。
お楽しみに!

http://www.geocities.jp/collective_web/

collective全体について、またこのpress collectiveについてのご意見・ご感想が僕達の最大の活力源です！皆でもっと楽しいパーティを作りませんか？ぜひ上記WEBサイトから皆さんの声を聞かせてください！

pick up of the issue

新選組旅行記 & sonarsound tokyo
2006

press collective

----- sonarsound tokyoとは

スペインのバルセロナで毎年6月に開催されている、アドヴァンスド・ミュージックとマルチメディア・アートの国際フェスティバル、sonar(ソナー)。そのサテライトイベントとして、2006年10月に東京の恵比寿で開催されたのがsonarsound tokyo 2006。2002年、2004年に続いた開催。今回のpress collectiveでは、そのsonarsound tokyo 2006のレポートをお届けします。

sonarというフェスティバルのおもしろいところは、非常に実験的だったり先進的だったりするアーティストから、いわばレイヴ的に盛り上げるエンターテインメント性をもったアーティストまでがラインナップされる幅の広さにあると思います。例えば、今年のスペインのsonarでは、竹村延和や岩井俊雄、坂本龍一とAlva Notolによるユニットinsenやドイツのscapeleravelのショウケースなどから、SashaやSatoshi TomiieやKenny DopeやJeff Millsなどがラインナップされていました。

sonarsound tokyoは、本家sonarと比べると規模は小さいですが、それでも普段あまり見ることのできないアーティストを多くそろえた価値のあるイベントといえます。今回のsonarsound tokyo 2006のラインナップは非常に特徴的でした。ヒップホップ勢を集めたDay1、テクノ・エレクトロニカ勢を集めたDay2、そしてスペシャルプログラムとしてヤン・富田のライブのあるDay3(残念ながら今回は3日目を見ることはできませんでしたが)といった構成で、ラインナップもルーツ回帰、とでもいうようなアーティスト/DJが多く招聘されていました。

----- sonarsound tokyo 2006 Day1

まず初日。スタートはsonarsound Extraという、いわば昼の部。午後3時台のスタートで恵比寿ガーデンプレイスの屋外広場で買い物客や犬の散歩中の人々もいるなかでのライブで、演奏されるのはいわゆるエレクトロニカ系の音楽なのですが、なんだかのんびり聴けました。みんな聴くともなしに楽しんでいる様子で、最もsonarらしい雰囲気なようにも感じられました。ただ途中で近隣からの苦情があったようで、メインスピーカーからはほとんど音がでないような状況になってしまい残念でした。怖そうなおじさんがPAのところに来てもめていたのを目撃してしまいました。。それからこの日は台風が日本近海にいて、さらにビルの谷間のような場所で行われていたため、風が強くて寒いくらいでした。あったかいコーヒーを飲みながら音の出ないライブを眺めて退屈していた記憶があります。風のせいでの最後のライブとその後の映画は中止になってしまいました。

そして夜10時からメイン会場がオープンします。初日はヒップホップ系アーティスト/DJを集めたラインナップ。僕はヒップホップには明るくないので、現在の日本のヒップホップがどのようなものなのか、非常に興味深くこの日のDJやライブを見ました。その中で、DJたち(すべて日本人DJ)に共通していたことがひとつありました。ヒップホップという、通常はBPM(Beats Per Minute:曲のテンポを表す単位)にして90~100くらいのビートを想像します。たしかに基本はそうしたビートなのですが、どのDJも必ずその倍くらいのスピードの高速ビートをプレイする時間帯を作っていました。

ドラムンベースともちがう、ヒップホップ特有のマッシヴなキックのビートです。それとも単にヒップホップではなく、ブレイクビーツの時間帯を作っていただけなのでしょうか。あまりヒップホップのDJを聴いたことがないのでわからないのですが、これはヒップホップ・マナーとして世界的な共通了解事項なのか、それとも日本のヒップホップ特有のマナーなのか。またこれは昔からそういうものだったのか、最近の傾向なのか。この高速ビートをこぞってプレイする、それに観客も盛り上がる、という現象を僕は初めて目撃し、正直困惑すら覚えました。バトル系DJのDJ BAKUやDJ KENTAROだけでなく、渋い抽象的ヒップホップサウンドで有名なDJ Krushまでがそのような時間帯を作っていたのです。数は少ないですが、僕が経験したことのあるヒップホップにはなかった現象だったので、僕はこれを最近の傾向ではないかとみえています。

それで盛り上がっているフロアには、「楽しければいい、盛り上がればいい」的な、ある種のレイヴ的な感性を感じざるを得ず、正直、何か違うのではないか、という気持ちがありました。しかし(ひたすら仮定の話なのですが)それが事実だとすれば、僕はこの国のヒップホップリスナー層のマインドの中に、つまりは東京の地下に渦巻く、ある種のフラストレーションについて、もしくは絶滅した(と個人的には思っている)ストリートカルチャーなるもののことを考えてしまうほかに、複雑な気持ちになっていました。今回はDJが日本人ばかりだったので、それが世界的に発生しているのか、それとも日本だけの現象なのかわからなかったのですが、ヒップホップに詳しい方がいたらぜひそのあたり教えていただきたいものです。

ヒップホップと言う音楽が、そのルーツとしては黒人たちのストリートでのパーティミュージック的なものをもっていることを考えれば、レイヴ的に盛り上がること、すなわちフラストレーション発散装置としての機能重視であったとしても、それは当然かもしれないと思います。それ自体についてはどう思うところはないのです。ただそれがsonarという場で、しかも大ホールでプレイした日本人DJ全員に共通していたということが、何かを象徴しているとか思えないのです。いや、それはDJだけではなく、スペインでも大絶賛されたというTuckerやAfra & Incredible Beatbox Bandのライブパフォーマンスにも共通するメンタリティだったように思います。

「sonar」という言葉は、スペイン語で「鳴る」とか「響き」とか、そのような意味の言葉のようです。sonarフェスティバルは、その他のフェスティバルよりも「音を聴くこと」を重視しているフェスティバルで、レイヴ的な、アップに盛り上がればよい、という感覚とは一線を画すものです。そのあたりとの齟齬が、Day1での僕の納得のいかなさなのだろうと思います。もちろん本家スペインのsonarにもレイヴ的な大パコ系DJが出演しますが、一晩中そればかりということはありません。スペインでは規模が大きく会場もいくつもあるから選べる、というのもあるとは思いますが、sonarsound tokyoも、sonarの名を冠する以上は、もっと意識的であってほしいと思います。

----- sonarsound tokyo 2006 Day2

朝カプセルホテルで眠り、2日目もsonarsound Extraから参加。2日目はスウェーデンのミュージシャンばかりが出演する日でした。強風のため、場所を隣の麦酒記念館(すぐそこがサッポロビールの本社なので)へ

移しての開催。Folieという人のライブがクールでした。そして前日強風で延期された京都のsoraのライブも期待通りとてもよかったです。

2日目の夜は、いわゆるsonar的なテクノ・エレクトロニカ系のライブが多いプログラムでした。まずToshio Iwaiによる不思議なデバイスを用いた実験的なメディアアートのライブ。そしてそれに続く、高橋幸宏のライブ。この幸宏のライブは個人的には今回のベストライブだと思います。まったく観客を煽ることなく、終始淡々と穏やかにライブを進めながらも、1曲1曲はとてすばらしく、カラダの内側からじわじわと感動が沸き上がってくるようなライブで、とてもよかったです。今年発売されたアルバムの曲を中心にプレイし、YMO「Cue」のカバーも披露。まさにsonarらしい素晴らしいライブでした。

この日もうひとつ特筆すべきライブは、ACOとTaeji Sawaiによるユニット、Golden Pink Arrowの初のライブ。Taeji Sawaiのワイルドなある種のぶっきらぼうさと適当さとちょっぴりのかわいらしさみいたなキャラクターが発揮されたロッキンな楽曲で、生ドラムとPCのトラックの強烈なベースが爆発的なかつこよさを出していきなり盛り上がるライブでした。

そして今年のsonarsound tokyoの目玉がアトム・ハートによるフェイク・ラテン・プロジェクト、Senior Coconut and His Orchestraのライブ。Senior CoconutはクラフトワークやYMOといったテクノ・オリジンのラテンカバーという面白いアルバムをリリースしており、今回は細野晴臣と高橋幸宏をゲストに迎えることが事前に告知されていました。バンドは約10人ほどの大所帯で、ファンキーで豊穣なラテンサウンドを演奏していました。そしてYMOやクラフトワークなどがプレイされるのです。ボーカリストもラテンリで煽る煽る。とても楽しいライブでした。個人的には初期YMOのカバーがとりわけ好みで、あのエキジチックなメロディとラテンプレイヤーが合わさって、何とも気持ちのいい音楽になるのです。

このように、個人的な感想としては、1日目についてはsonarとは呼び難いものがありました。2日目はsonarらしい多様性と音の響きを感じさせる内容だったと思います。2日目はレイヴのりのアーティストも出演していましたが、他のベクトルのアーティストとのバランスがよかったです。それぞれにあった楽しみ方ができたように思います。ただ今回は初めて出会った音楽に衝撃をうけるような経験はできなかったな、というのも正直なところ。また日本のエレクトロニクミュージックがYMO関連から逃れられない、超えられないという側面も見えたのではないかと思います。会場運営も相変わらずいいとは言えず、問題を多く抱えていると思います。しかしできることなら毎年開催して、より意識の高いイベントになってくれることを期待しています。

(Kengo Matsui)

